

徂徠集・序類
訳注稿（五）

岡本光生
澤井啓一

徂徠集・序類 訳注稿(五)

岡本光生

澤井啓一

凡例

一、今回は次の四點を取上げた。

同齋越先生八十壽 卷之九／享保六年・一七二一

水足氏父子詩卷序 卷之八／享保六年・一七二一

官刻六諭衍義鈔 卷之九／享保六年・一七二一

送釋玄海歸崎陽序 卷之十／享保八年・一七二三

同齋越先生八十壽序

同齋先生、席⁽¹⁾纍世⁽²⁾廩仕之資、加以⁽³⁾待從之勞、業已儼⁽⁴⁾然顯爲⁽⁵⁾諸大醫先生祭酒者、數十年矣。是歲享保之辛丑、年寔八十、而正月十有九日丁巳、爲⁽⁷⁾其皇覽之辰也。則自⁽⁸⁾親戚知友、暨⁽⁹⁾乎門生義故、靡⁽¹⁰⁾然聚、而謀⁽¹¹⁾所以壽⁽¹²⁾先生⁽¹³⁾焉。迺君瑞徵⁽¹⁴⁾余文。余不佞⁽¹⁵⁾以⁽¹⁶⁾諸侯之

臣、抱⁽¹⁷⁾病乎、陟⁽¹⁸⁾伏北門之郊、而舊⁽¹⁹⁾扉⁽²⁰⁾扉⁽²¹⁾戶之與鄰、唯⁽²²⁾丘里之言是媿、則烏能脩⁽²³⁾辭樽俎之上、以中⁽²⁴⁾先生之驩。雖⁽²⁵⁾然、先生者先子之執也。而余又辱⁽²⁶⁾君瑞從游、則又烏能辭。惟夫⁽²⁷⁾國家融朗敦龐之化、洋溢⁽²⁸⁾乎四海、旁⁽²⁹⁾皇乎⁽³⁰⁾天地、玉燭所⁽³¹⁾燭、和風翔而甘雨施者、殆⁽³²⁾踰⁽³³⁾百年

之久。而民之濡沐⁽²⁷⁾沐浴其德也。上焉文恬武熙⁽²⁹⁾莫所
 事⁽³⁰⁾。下焉鼓腹含哺⁽³¹⁾于我何有哉。是壽絲也。時
 或煥⁽³²⁾寒之少志。而淫厲札瘥⁽³³⁾之闕其化。則有諸大醫先
 生、操其刀圭⁽³⁴⁾齊以湯液⁽³⁵⁾解⁽³⁶⁾攀起⁽³⁷⁾甦⁽³⁸⁾生⁽³⁹⁾死肉⁽⁴⁰⁾骨
 以俾斯民克丞⁽⁴¹⁾丞於壽⁽⁴²⁾以輔⁽⁴³⁾口皇上之仁於下焉。則
 古人等⁽⁴⁴⁾其功烈⁽⁴⁵⁾亞⁽⁴⁶⁾諸良將之治⁽⁴⁷⁾者。豈虛語哉。是亦
 壽絲也。其其或為⁽⁴⁸⁾名高所使⁽⁴⁹⁾或為⁽⁵⁰⁾其糈⁽⁵¹⁾而奔趨營求
 之弗⁽⁵²⁾違⁽⁵³⁾籛條威施⁽⁵⁴⁾無所⁽⁵⁵⁾不至⁽⁵⁶⁾以滑⁽⁵⁷⁾其和⁽⁵⁸⁾以天⁽⁵⁹⁾
 其天年⁽⁶⁰⁾者。世豈⁽⁶¹⁾勦⁽⁶²⁾哉。亦非⁽⁶³⁾天齋⁽⁶⁴⁾其報⁽⁶⁵⁾也。迺急⁽⁶⁶⁾其
 報於棄⁽⁶⁷⁾之過也。惟先生不⁽⁶⁸⁾然。先生之先人⁽⁶⁹⁾起⁽⁷⁰⁾家勝⁽⁷¹⁾
 國之際⁽⁷²⁾其所⁽⁷³⁾以扶⁽⁷⁴⁾創夷⁽⁷⁵⁾於兵革之餘⁽⁷⁶⁾納⁽⁷⁷⁾諸曠蕩之澤⁽⁷⁸⁾
 蓋⁽⁷⁹⁾口國家更始⁽⁸⁰⁾焉。遂守⁽⁸¹⁾其鴻術⁽⁸²⁾仁與⁽⁸³⁾世邁⁽⁸⁴⁾益茂⁽⁸⁵⁾昌其
 業⁽⁸⁶⁾以至⁽⁸⁷⁾先生之身⁽⁸⁸⁾亦踰⁽⁸⁹⁾百年之久⁽⁹⁰⁾是以望高家富
 迫出⁽⁹¹⁾濟輩⁽⁹²⁾是豈世之食⁽⁹³⁾其伎⁽⁹⁴⁾者倫哉。余又聞⁽⁹⁵⁾之先子
 之言⁽⁹⁶⁾曰。先生者君子人也。亦惟⁽⁹⁷⁾種滌⁽⁹⁸⁾為⁽⁹⁹⁾性⁽¹⁰⁰⁾孝友為⁽¹⁰¹⁾
 植⁽¹⁰²⁾樂⁽¹⁰³⁾善博⁽¹⁰⁴⁾施⁽¹⁰⁵⁾忠信⁽¹⁰⁶⁾行之⁽¹⁰⁷⁾不⁽¹⁰⁸⁾棄⁽¹⁰⁹⁾人之急⁽¹¹⁰⁾不⁽¹¹¹⁾利⁽¹¹²⁾
 人之厄⁽¹¹³⁾寧玷⁽¹¹⁴⁾其名⁽¹¹⁵⁾孰⁽¹¹⁶⁾若濟⁽¹¹⁷⁾物⁽¹¹⁸⁾寧喪⁽¹¹⁹⁾其穫⁽¹²⁰⁾孰⁽¹²¹⁾若
 範⁽¹²²⁾我⁽¹²³⁾。又蚤聞⁽¹²⁴⁾至⁽¹²⁵⁾人之道⁽¹²⁶⁾蟬⁽¹²⁷⁾蛻⁽¹²⁸⁾塵⁽¹²⁹⁾蓋⁽¹³⁰⁾之表⁽¹³¹⁾金心不⁽¹³²⁾

滓⁽⁷³⁾。皜若⁽⁷⁴⁾冰雪⁽⁷⁵⁾。故無⁽⁷⁶⁾赫赫⁽⁷⁷⁾之譽⁽⁷⁸⁾而有⁽⁷⁹⁾恂恂⁽⁸⁰⁾之行⁽⁸¹⁾者
 惟先生為⁽⁸²⁾爾。是天之所⁽⁸³⁾以⁽⁸⁴⁾賜⁽⁸⁵⁾於先生⁽⁸⁶⁾歟⁽⁸⁷⁾數世之仁⁽⁸⁸⁾
 厚集⁽⁸⁹⁾諸其身⁽⁹⁰⁾而先生迺⁽⁹¹⁾薄享⁽⁹²⁾之⁽⁹³⁾則先生之壽⁽⁹⁴⁾固其所⁽⁹⁵⁾
 哉。方今君瑞績⁽⁹⁶⁾學弗⁽⁹⁷⁾怠⁽⁹⁸⁾克⁽⁹⁹⁾家弗⁽¹⁰⁰⁾殆⁽¹⁰¹⁾行將⁽¹⁰²⁾廓培⁽¹⁰³⁾其
 仁⁽¹⁰⁴⁾以濟⁽¹⁰⁵⁾奕世之美⁽¹⁰⁶⁾夫其所⁽¹⁰⁷⁾以⁽¹⁰⁸⁾孝⁽¹⁰⁹⁾事先生⁽¹¹⁰⁾而養⁽¹¹¹⁾其志⁽¹¹²⁾
 豈徒⁽¹¹³⁾滄澗⁽¹¹⁴⁾甘旨⁽¹¹⁵⁾溫清⁽¹¹⁶⁾與⁽¹¹⁷⁾色⁽¹¹⁸⁾已哉。則先生其無⁽¹¹⁹⁾憂乎⁽¹²⁰⁾。惟人
 憂斯⁽¹²¹⁾損⁽¹²²⁾壽⁽¹²³⁾。有⁽¹²⁴⁾子若斯⁽¹²⁵⁾將⁽¹²⁶⁾又何憂⁽¹²⁷⁾。先生之壽⁽¹²⁸⁾殆未⁽¹²⁹⁾
 有⁽¹³⁰⁾艾也⁽¹³¹⁾。八十曰⁽¹³²⁾耄⁽¹³³⁾。先生老而未⁽¹³⁴⁾耄⁽¹³⁵⁾。由⁽¹³⁶⁾耄而耄⁽¹³⁷⁾以
 至⁽¹³⁸⁾期頤⁽¹³⁹⁾先生之壽⁽¹⁴⁰⁾豈有⁽¹⁴¹⁾艾哉⁽¹⁴²⁾。君瑞於⁽¹⁴³⁾是乎與⁽¹⁴⁴⁾再拜言
 曰。珪雖⁽¹⁴⁵⁾不敏⁽¹⁴⁶⁾願服⁽¹⁴⁷⁾膺子之言⁽¹⁴⁸⁾以長事⁽¹⁴⁹⁾家君⁽¹⁵⁰⁾焉。庶
 以免⁽¹⁵¹⁾其罪戾⁽¹⁵²⁾邪。不⁽¹⁵³⁾翅家君之幸⁽¹⁵⁴⁾也。物子亦再拜曰。
 果爾。先生之壽⁽¹⁵⁵⁾愈益莫⁽¹⁵⁶⁾有⁽¹⁵⁷⁾艾已。不佞⁽¹⁵⁸⁾幸甚⁽¹⁵⁹⁾則賦⁽¹⁶⁰⁾
 南山有臺⁽¹⁶¹⁾之章⁽¹⁶²⁾以為⁽¹⁶³⁾先生壽⁽¹⁶⁴⁾。

〔語注〕

(1) 列子·楊朱入桀藉累世之資、居南面之尊。(2)
 詩·節南山入瑣瑣姻亞、則無膺仕。(3) 漢書·孝宣
 霍皇后傳入皇后舉駕、侍從甚盛、(班固)兩都賦序

△言語侍從之臣▽。(4) 論語·堯曰△尊其瞻視儼然▽。
 (5) 史記·韓非傳△顯爲名高也▽。(6) 史記·荀卿傳
 △齊襄王時、而荀卿最爲老師、齊尙修列大夫之缺、而
 荀卿三爲祭酒焉▽。(7) 楚辭·離騷△皇覽揆余初度
 兮▽。(8) 禮記·曲禮上△兄弟親戚稱其慈▽。(9) 呂
 氏春秋·貴當△入則媿其家室、出則媿其知友州里▽。
 (10) 宋書·謝靈運傳△靈運因父祖之資、生業甚厚、奴
 僮既衆、義故門生數百▽。(11) 左傳·成公十三年△寡
 人不佞▽。(12) (沈佺期) 初達隴州詩△夜則忍饑臥、
 朝則抱病走▽。(13) (王延壽) 魯靈光殿賦△狡兔踈伏
 於柎側▽。(14) 禮記·儒行△簞門圭齋、蓬戶甕牖▽。
 (15) 莊子·則陽△少知問於大公調曰、何謂丘里之言。
 大公調曰、丘里者、合十姓百名、而以爲風俗也▽。
 (16) 易·乾·文言△修辭立其誠、所以居業也▽。(17)
 史記·樂書△布筵席、陳樽俎、列籩豆▽。(18) 孟子·
 公孫丑上△吾先子之所畏也▽。(19) 禮記·曲禮上△見
 父之執、不謂之進、不敢進。不謂之退、不敢退、不
 問、不敢對。此孝之行也▽。(20) 史記·仲尼弟子列傳

△子路喜從游▽、漢書·楊雄傳△好事者載酒肴從游
 學▽。(21) (木華) 海賦△三光既清、天地融朗▽、舊
 唐書·明皇紀△景氣融朗▽。(22) 左傳·成公十六年
 △民生敦老、和同以聽▽。(23) 禮記·中庸△是以聲名
 洋溢乎中國▽。(24) 史記·禮書△旁皇周浹▽。(25) 漢
 書·武帝紀△日月所燭、莫不率俾▽。(26) 管子·四時
 △柔風甘雨乃至▽。(27) (司馬相如) 難蜀父老△群生
 霑濡、洋溢乎方外▽。(28) 論語·憲問△孔子沐浴而
 朝▽、禮記·儒行△澡身而浴德▽。(29) (韓愈) 平淮
 西碑△相臣將臣、文恬武嬉▽。(30) 韓非子·內儲說上
 △吾知吏之不事事也▽。(31) 莊子·馬蹄△夫赫胥氏之
 時、民居不知所爲、行不知所之、含哺而熙、鼓腹而
 游▽、(紀政綱目)△帝遊康衢。有老人、含哺鼓腹、擊
 壤而歌曰、日出而作、日入而息、鑿井而飲、耕田而
 食。帝何力於我哉▽。(32) 書經·洪範△八庶徵：曰
 燠、曰寒▽、禮記·內則△下氣怡聲、問衣燠寒▽。
 (33) 左傳·昭公七年△匹夫匹婦強死、其魂魄猶能憑依
 于人、以爲淫厲▽。(34) 左傳·昭公十九年△鄭國不

天、寡君之二三臣、札瘥夭昏。(35)神仙傳入此是神丹、飲者不死、夫婦各一刀圭。(36)史記·扁鵲傳入治病不以湯液、同·倉公傳入臣意即爲之液湯火齊逐熱。(37)左傳·襄公二十二年入夫子所謂生死而肉骨也。(38)書經·堯典入以孝烝烝、父不格姦。(39)陸機·皇太子宴玄圃宣猷堂有賦詩入皇上纂隆、經教弘道。(40)左傳·襄公十九年入銘其功烈、孟子·公孫丑上入功烈如彼其卑也。(41)管子·立政九敗解入彼以良將、我以無能。(42)文士傳入古人豈虛語哉。(43)史記·韓非傳入顯爲名高也。(44)韓愈·碑銘入叫諫奔趨、乘門請起。(45)書經·說命序入高宗夢得說、使百工營求諸野、得諸傅巖、後漢書·獻帝紀入營求糧資、不得專業。(46)史記·賈生傳入孝文帝初即位、謙讓未遑。(47)詩經·新臺入燕婉之求、籛條不鮮、燕婉之求、籛條不殄、燕婉之求、得此戚施、淮南子·脩務訓入啞啞哆鳴、籛條戚施。(48)禮記·大學入小人閒居爲不善、無所不至。(49)莊子·德充府入不足以滑和。(50)莊子·山木入得終

其天年。(51)書經·多士入惟殷先人、有册有典。(52)史記·鼂錯傳入鄧公免、起家爲九卿。(53)周禮·地官·媒氏入凡男女之陰訟、聽之于勝國之社。(54)漢書·淮南厲王長傳入身被創痍。(56)禮記·月令入天多沈陰、淫雨蚤降、兵革並起。(57)後漢書·馬融傳入坳場區宇、恢昭曠蕩。(58)史記·齊太公世家入遷九鼎、脩周政、與天下更始。(59)郭璞·巫咸山賦入寔以鴻術、爲帝堯醫、生爲上公、死爲貴神。(60)說苑入周公卜居曲阜、其命龜曰、作邑乎山之陽、賢則茂昌、不賢則速亡。(61)魏志·武帝紀入同時儕輩。(62)史記·貨殖傳入醫方諸食技術之人、焦神極能、爲重糶也。(63)論語·泰伯入君子人與、君子人也。(64)晉書·儒林傳入杜夷清虛沖淡、與俗異軌、宋史·趙景緯傳入天性孝友、雅志沖澹。(65)任昉·爲范始興作求立太宰碑表入事止樂善、亦無得而稱焉。(66)論語·雍也入子貢曰、如能博施於民、而能濟衆、何如。(67)禮記·大學入忠信以得之。(68)謝靈運·述祖德詩入兼抱濟物性而不纓垢氣。(69)

孟子・滕文公下△吾爲之範我馳驅、終日不獲一。

(70) 莊子・逍遙遊△至人無己。(71) 史記・屈原傳

△蟬蛻於濁穢、以浮游塵埃之外、(李于鱗) 報劉子

威書△計且欲立埃瑳之表、坐覽千里不遏之勢、有裕然

焉。(72) 管子・心術下△金心在中、不可匿。(73)

史記・屈原傳△皜然泥而不滓者也。(74) 莊子・逍遙

遊△肌膚若冰雪。(75) 詩經・節南山△赫赫師尹、民

具爾瞻、荀子・勸學△惛惛之事、無赫赫之功。

(76) 論語・鄉黨△孔子於鄉黨恂恂如也。(77) 禮記・

表記△詩云、豐水有芑、武王豈不仕。詒厥孫謀、以燕

翼子。武王烝哉。數世之仁也。(78) 書・書爽△其集

大命于厥躬。(79) 左傳・哀公十六年△此事克則爲

卿。不克則烹。固其所也。何害。(80) (蔡襄) 文

△自秦滅漢興、綴文績學、德業彬然、獨董仲舒而已。

(81) 易・蒙△納婦吉、子克家、論語・述而△子曰、

默而識之、學而不厭、誨人不倦、何有於我哉。(82)

左傳・文公十八年△世濟其美、不隕其名、國語・

周語△突世載德、不忝前人。(83) 孟子・離婁上△若

曾子則可謂養志也。(85) 禮記・內則△滫瀡以滑之、

脂膏以膏之。(86) 禮記・內則△味爽而朝、以旨

甘。(87) 禮記・曲禮上△凡爲人子之禮、多溫而夏

清。(88) 論語・爲政△子夏問孝。子曰、色難。

(89) 左傳・昭公元年△憂能無至乎。(90) 漢書・禮樂

志△內則致疾損壽、外則亂政傷民。(91) 禮記・中庸

△無憂者、其唯文王乎。以王季爲父、以武王爲子。父

作之、子述之、晉書・周嵩傳△不謂爾等竝貴列、吾

目前、吾復何憂。(92) 詩・訪落△於乎悠悠。朕未有

艾。(93) 禮記・曲禮上△八十九曰老。(94) 詩・

車鄰△逝者其耄。(95) 禮記・曲禮上△百年曰期頤。

(96) 禮記・曲禮下△再拜首而后對。(97) 論語・顏淵

△回雖不敏、請事斯語矣。(98) 禮記・中庸△得一善

則拳拳服膺、而弗失之矣。(99) 左傳・莊公二十二年

△免於罪戾。(100) 史記・晉世家△二子頓首曰、幸

甚、幸甚。

同齋越先生八十の寿の序⁽¹⁾

同齋先生⁽²⁾は、代々受け継いだ厚祿の位により、加うるに將軍の側近として仕えた功勞によつて、重々しくもろもろの優秀な医師たちの祭酒(官医の長)の地位にあること、数十年。今年、享保辛丑(六年)、先生は八十才を迎え、しかも正月十九日丁巳はその誕生の日である。そこで、親戚、知友から門生、恩顧を受けた人々に至るまで、集まり至つて先生の八十才を祝おうと謀つた。かくて「子息の」君瑞⁽³⁾が私に文章を求めたのである。

私は、諸侯の臣であつて、病を抱え「江戸城の」北郊外⁽⁴⁾に隠棲し、しかも隣近所は粗末で貧しい家々、田舎風の言葉、それらにすっかり慣れてしまつたので、どうして宴席で文章を修め、先生の寿の祝いにあつてることができようか。とはいふものの、先生は、わが父の友人であり、しかもまた辱じけなくも子息の君瑞はわが門に従遊しており、どうして辞退することができようか。

今、国家の透けるように清らかな、厚く偉大なる化育は、四海に溢れ、天地にあまねく、輝く光の照らすところ、穏やかな風がそよぎ、恵みの雨が降ること、百年の久しきを越える。民はその徳化に浴し、上、文武の官はともに、なすべき事もなく太平を楽しみ、下、民衆は飽食して、何の憂いもなく生を楽しみ、帝の力など我々には何の関わりもない、としている。これこそ「人々の」長寿の理由である。

ときにあるいは、寒暑の調和がすこしく乱れ、災い、祟り、疫病がその化育を妨げることもあるが、そのときにはもろもろの優秀な医師たちが、その匙を操り、薬液を調合し、手や足の麻痺を治癒し、瀕死の人を蘇生させ、瘦せこけた人を肥らせ、民を潑刺として長寿たらしめ、天子の大いなる仁徳が下に行きわたつたのを輔けるのだ。かくて、古人は、その功績を優秀な武將の治績につぐものとしているが、それは、けつして虚語ではないのである。これもまた「人々の」長寿の理由である。

しかし、あるいは名譽に追われ、あるいは生活の糧のために走り回って忙しく、頭を低くしてどこにでも赴き、かくて生の調和を損ね早死してしまふ、そういうものたちが世に少なくない。これは、また天が応報を惜しんだわけではない。あまりに応報を求めるのに急であつたことの過ちなのだ。

ただ先生だけはそのうではない。先生の先祖は、前朝の世（戦国・豊臣時代）に家を起こしたのだが、戦乱で傷ついた人々を救い、広大な恩沢を被らせるに至つたのは、国家とともに新しく生まれ変わったからである。かくて、その大いなる医術を守り、仁愛は世に適合し、その業をますます盛んにし、やはりまた百年の久しきを経て先生の代に至つた。かくて名望の高さと家の富裕さ、われわれをはるかに抜きんでたのである。どうして世の医術で食を得ているものたちと同類であろうか。私は、そのうえわが父の「先生は君子である。さらに「先生の」性格はさっぱりしており、よく父母に事え、兄弟に親しむことを志しとし、善を楽

しみ博く施し、行いには心をこめ、人の危急を見棄せず、人の厄窮を利用せず、みずからの名を傷つけても人を濟い、たとえ獲物を失おうとも規範を守る。また早くから『至人』の道を学んで、塵や埃にまみれた俗世をさっぱりと捨て、精妙なる心は汚れず、氷雪のように清らかだ。だから、赫赫たる名譽はないが、誠実なる行いのある人物、先生こそそのような人なのだ。」という言を聞いたことがある。これが、天が先生に長寿を賜つた理由である。先祖からの仁をわが身に厚く集め、しかも先生はこれを薄く享受したのであつて、先生の長寿には、もちろんその理由があるのだ。

今、君瑞は、学問に研鑽し、よく家を治めて、まさに広く仁を培い、数代にわたる優れた医術を完成せんとしてゐる。そもそも君瑞が先生に孝を尽くして事え、その心を満足させることのできるのは、ただ柔らかく、美味しい食事、夏は涼しく冬は温かい住居、そして接するに和らいだ表情、ただそれだけであろうか。もしそれだけならば、先生には憂いがあるに違いな

い。憂いこそが寿命を損なうのだが、「しかし」子息がこのようなきちんと後を継いでいるのだから、また何の憂いがあるうか。

先生は長寿ではあるが、いまだほとんど白髪はない。八十歳を耄と言うが、先生は耄であっていまだ耄ではない。耄より耄、耄より期頤(百歳)に至るまで、先生はますますの長寿を保ち、老衰して白髪となる、ということなどなからう。

君瑞は、ここにおいて立ち上がり頭を下げ「私、珪は愚か者ではあるが、願わくばあなたの言葉を一言も忘れず、長く父に事えたいものだ。どうか、それによって私のこれまでの罪を免れたいものだ。そうなければ、父の幸い、というばかりではないのだ〔私にとっても幸いなのだ〕。」と言った。

私、物子もまた頭を下げ「やはりそうであるのだ。先生はこれからも長寿を保ち、老衰して白髪となることなどますます無縁とならう。幸福な気持ちで私は胸が一杯だ。詩の南山有台の章を詠い、先生の長寿の祝

いとしよう。」と述べた。

〔訳注〕

(1) 本文によれば享保六(一七二二)年正月一五日の作。

(2) 曲直瀬正珍(一六四四～一七二八)。曲直瀬道三の子孫。平庵また同斎とも号す。幕府に召され、のち法眼、さらに法印に叙せられ、曾祖父正琳の号、養安院を襲った。幕府に仕えること三〇余年。しばしば賞賜を受け、千九百石を取るに至った。享保一三年病没、年八五歳。

(3) 越智雲夢(一六八六～一七四六)。曲直瀬氏。同斎の子。名は正珪、字は君瑞、雲夢はその号。父の後を襲い、法印に叙せられ、養安院と号した。また徂徠の門に入り、服部南郭、平野金華とよく交わった。延享三年没。

(4) 赤城を指す。徂徠が牛込から赤城に転居したのは享保五年五月。九年六、七月ごろまでそこに居

り、市ヶ谷大住町に転居する。

(5) 曲直瀬氏の初代、曲直瀬道三(一五〇七〜一五

九四)はもと僧侶、天文一五(一五四六)年に還俗。

京都においてもっぱら医を業とし、晩年は豊臣秀

吉、徳川家康にも尊重された。永禄三年没。没後、

慶長一三年、法印を贈られた。子孫は、幕府に医官

として仕え、繁栄した。

(6) 「至人」は『莊子』にみえる概念。「至人無己、神

水足氏父子詩卷序

余幼時、聞之太孺人⁽¹⁾云、肥有高麗門。蓋當豐王

之征⁽²⁾三韓、肥之先侯、有加藤氏者。爲冠軍、驍勇

功最著。高麗人至今猶以怖兒啼⁽³⁾曰、鬼將軍來也、

兒廼泣而不啼。其比諸羅刹⁽⁴⁾・夜叉⁽⁵⁾・噉人類⁽⁶⁾・威武所

懾伏⁽⁷⁾可知已。及其歸也、以所屠陷⁽⁸⁾・城門⁽⁹⁾・歸、表

以爲京觀⁽¹⁰⁾云。太孺人猶尚及躬親見之、識其材

鉅麗詭異者狀。又旁聞父老⁽¹¹⁾・長年者所⁽¹²⁾・觀記⁽¹³⁾、鬼將軍戰

時它遺佚事⁽¹⁴⁾、多世所⁽¹⁵⁾・不傳者。初余之内姊嫁肥士人

人無功、聖人無名」(逍遙遊)、「不離真、謂之至人」

(天下) などとある。

(7) 「南山有台」は詩の小雅の篇名。詩序に「南山

有台、樂得賢也。得賢則能為邦家、立太平之基矣」

とある。また「南山」は詩の小雅・天保に「如月之

恆、如日之升、如南山之壽、不蹇不崩」とある。

(岡本)

水間氏之子。太孺人、以其爲外孫女、絶鍾愛之、

攜以往、觀其所⁽¹⁶⁾・以事舅姑⁽¹⁷⁾。若君子何如也。因置三

年、廼歸。歸則時顧余輩⁽¹⁸⁾・襁褓中⁽¹⁹⁾、語鬼將軍事、媿

媿乎弗⁽²⁰⁾・已、以相慰藉⁽²¹⁾。其將⁽²²⁾・睡時、每夜率以爲⁽²³⁾・常。

距⁽²⁴⁾・于今⁽²⁵⁾・四五十年、言猶在⁽²⁶⁾・耳弗⁽²⁷⁾・忘也。其後内弟僧香

洲西游歸、廼謂⁽²⁸⁾・彼中人士⁽²⁹⁾、近多彬彬焉、余猶且⁽³⁰⁾・怫然

疑⁽³¹⁾・之。及⁽³²⁾・於五六年來、與⁽³³⁾・數⁽³⁴⁾・墨⁽³⁵⁾・二君⁽³⁶⁾・相識、皆湛⁽³⁷⁾・滔

墳籍⁽³⁸⁾、翔⁽³⁹⁾・泳⁽⁴⁰⁾・南雅⁽⁴¹⁾、其所⁽⁴²⁾・著述⁽⁴³⁾、頗翩翩有⁽⁴⁴⁾・致也。余始

駭然異₍₃₇₎之。越客歲、文學水足君者、廼价₍₃₈₎數君、千里辱₍₃₉₎書問、請余言弁₍₄₀₎其詩卷。披₍₄₁₎之則攜₍₄₂₎其兒郎₍₄₃₎邀₍₄₄₎韓使浪館中、與相酬和者也。對₍₄₅₎墨文苑₍₄₆₎、旗鼓相當₍₄₇₎。賈₍₄₈₎勇爭₍₄₉₎勝、矯不₍₅₀₎肯₍₅₁₎下。余於₍₅₂₎是乎喟然嘆息久₍₅₃₎之。烏乎肥人之於韓、昔以₍₅₄₎武爭、今則文競、豈非₍₅₅₎世治₍₅₆₎亂₍₅₇₎之效邪。夫肥、自₍₅₈₎鬼將軍以₍₅₉₎威威₍₆₀₎振₍₆₁₎于海表₍₆₂₎、而流風餘韻₍₆₃₎、被₍₆₄₎於邦俗、以余之所₍₆₅₎素聞₍₆₆₎。武藝相雄長₍₆₇₎、稱₍₆₈₎大師₍₆₉₎者何限。今則否。昇平百年、加以₍₇₀₎憲廟右文之治₍₇₁₎、蒸蒸乎₍₇₂₎覃₍₇₃₎退方₍₇₄₎、才子輩出₍₇₅₎、不₍₇₆₎讓₍₇₇₎中土₍₇₈₎。昔之爭也武夫₍₇₉₎、今之爭也君子₍₈₀₎。曾謂₍₈₁₎斯卷不₍₈₂₎若₍₈₃₎高麗門₍₈₄₎乎。文學之選₍₈₅₎、譽重₍₈₆₎一邦、固無₍₈₇₎嫉₍₈₈₎余論₍₈₉₎。而汗血之駒₍₉₀₎駸駸日上₍₉₁₎、亦何以能定₍₉₂₎其所₍₉₃₎底止₍₉₄₎也。獨以₍₉₅₎太大人之言猶在₍₉₆₎耳、而惟夫肥俗之所₍₉₇₎以不₍₉₈₎變₍₉₉₎者、書以爲₍₁₀₀₎紱。

〔語注〕

- (1) 禮記・曲禮下△天子之妃曰后、∴大夫曰孺人△。
 (2) 史記・項羽紀△號爲卿子冠軍△、漢書・黥布傳

△布常冠軍△。(3) 魏志・袁紹傳△雖驍勇、不可獨任△。(4) (庚闡) 近遊賦△書兒啼於客室△。(5) 隋書・帝紀(大業四年) △遣屯田主事常駿使赤土、致羅刹△、玄應音義二四△刹娑、∴是惡鬼之通名也、∴舊云羅刹、訛畧也△。(6) 玄應音義三△闍叉、或云夜叉、皆訛也、∴謂食噉人也△。(7) 後漢書・南蠻傳△其西有噉人國△。(8) 孟子・滕文公下△威武不能屈△、爾雅・釋天△出爲治兵、尙威武也△。(9) 史記・蔡澤傳△楚趙皆備伏△、戰國・趙策△敝邑恐懼備伏△。(10) (張說) 露布△軍城被其屠陷△。(11) 左傳・宣公十二△君蓋棄武軍而收晉戶、以爲京觀△。(12) 詩・節南山△弗躬弗親△、漢書・劉向傳△陛下卽位、躬親節儉△。(13) (左思) 吳都賦△子獨未聞大吳之巨麗乎△。(14) (張衡) 西都賦△開庭詭異、門千戶萬△。(15) 史記・憑唐傳△父老何自爲郎△。(16) 說苑・貴德△觀長年負薪而有饑色△。(17) 史記・魏世家△以耳目之所覩記、臣何負於魏成子△。(18) 孟子・公孫丑下△遺佚而不怨△、漢書・五行志△舉遺逸獨行△。

- (19) 爾雅·釋親△女子子之子、爲外孫▽。(20) 南史·江總傳△元舅吳平侯蕭勸、特所鍾愛▽。(21) 淮南子·要略△武王崩、成王在襁褓之中、未能用事▽、大戴禮·保傳△昔者周成王幼、在襁褓之中▽。(22) 正字通△媿、本作賸▽、詩·文王△賸賸文王、令聞不已▽。(23) 後漢書·隗囂傳△光武素聞其風聲、∴所以慰藉之良厚▽。(24) (韓愈) 上張僕射書△率以爲常、亦不廢事▽。(25) 左傳·文公七△今君雖終、言猶在耳▽。(26) (杜甫) 毒熱寄簡崔評事詩△開襟仰內弟▽。(27) 詩·都人士△彼都人士、狐裘黃黃▽。(28) 論語·雍也△文質彬彬、然後君子▽。(29) 史記·老莊申韓傳「大忠無所拂辭」注△拂、當爲拂▽、大戴禮·文王官人△怒色拂然以侮▽、莊子·天地△謂己諛人、則怫然作色▽。(30) 左傳·襄公二九△見子產、如舊相識▽。(31) 集韻△浸、或作湛▽、(韓愈) 送孟東野序△其高出魏晉、不懈而及於古、其他浸淫乎漢氏矣▽。(32) 後漢書·李固傳△遂究覽墳籍▽、晉書·魯芝傳△耽思墳籍▽。(33) 穆天子傳三「翔敞于曠原」注△翔、猶遊也▽、(顏延之) 三月三日曲水詩序△游泳之所攢萃、翔驟之所往還▽、舊唐書·音樂志△翔泳歸仁▽。(34) (陳傳良) 送梓景英赴闕詩△言詩必南雅▽。(35) 漢書·賈誼傳贊△凡所著述五十八篇▽。(36) (魏文帝) 與吳質書△元瑜書記、翩翩致足樂也▽。(37) 唐書·杜元穎傳△穆宗以元穎多識朝章、∴不閱歲至宰相、縉紳駭異▽。(38) 漢書·東方朔傳△武帝初即位、∴舉方正賢良文學材力之士▽。(39) 杜預·歲終帖△遠道書問又簡▽。(40) 晉書·劉琨傳△盧諶素無奇略、以常詞酬和▽。(41) 晉書·宣帝紀△與之對壘百餘日▽。(42) 文心雕龍·才略△晉世文苑、足儷鄴都▽。(43) 後漢書·隗囂傳△願因將軍兵馬、旗鼓相當▽。(44) 左傳·成公二八△欲勇者、賈其餘勇▽、(唐玄宗) 觀拔河戲詩△壯徒恒賈勇▽。(45) 漢書·武五子傳「欲擒邪防非」注△擒、與矯同▽、荀子·臣道△擒然剛折端志▽、史記·扁鵲傳△舌矯然而不下▽。(46) 史記·豫讓傳△襄子喟然歎息而曰▽、論語·子罕△喟然而歎曰▽、禮記·祭義△愾然必有聞乎其歎息之聲▽。(47) 書·君牙

八民之治亂在茲、後漢書・崔寔傳八夫刑罰者、治亂之藥石也。(48) 史記・信陵君傳八當是時、公子威振天下。(49) 書・立政八天下至于海表、罔有不服。(50) (歐陽脩) 峴山亭記八至於流風餘韻、藹然被於江漢書之間者、孟子・公孫丑上八其故家遺俗、流風善政、猶有存者。(51) (班固) 典引八臣具對素聞知狀、後漢書・隗囂傳八光武素聞囂風聲。(52) 蜀志・劉封傳八武藝氣力過人。(53) 吳志・士燮傳八變兄弟竝爲列郡、雄長一州。(54) 史記・伏生傳八諸山東大師、無不涉尚書以教矣。(55) (韓愈) 賀慶雲表八昇平之符既兆。(56) 宋史・禮志八用廣列聖崇儒右文之聲。(57) 詩・泮水八烝烝皇皇、不吳不揚、書・堯典八烝烝乂不格姦。(58) (揚雄) 長楊賦八還方疏俗、吳志・諸葛恪傳八揚聲遐方。(59) 左傳・文公十八八昔高陽氏有才子八人。(60) 後漢書・蔡邕傳八於是名臣輩出、文武竝興。(61) 後漢書・西域傳論八其國則殷乎中土。(62) 詩・免置八赴赴武夫、公侯干城。(63) 論語・八佾八其爭也君子。(64) 論語・

八佾八曾謂泰山不如林放乎。(65) 後漢書・蔡邕傳八孝武之世、…又有賢良文學之選。(66) (蘇軾) 次孔文仲見贈詩八君如汗血馬、作駒權奇、漢書・武帝紀八獲汗血馬來。(67) 詩・四牡八駕彼四駱、載驟駸駸。(68) 世說新語、賞譽八王平子與人書、稱其兒曰、風氣日上、足散人懷。(69) 詩・祈父八胡轉予于恤、靡所底止。(70) 書・盤庚上八罔有逸言、民用丕變。

水足氏父子詩卷の序⁽¹⁾

私は幼いときに祖母⁽²⁾からつぎのように聞かされた：
 八肥後の国には高麗門がある。豊王(豊臣秀吉)が三韓(李氏朝鮮)に攻め入った頃のことだが、肥後の前の殿様に加藤という者がいて、大將軍で、英雄としての功績は一番すぐれておった。いまでも高麗(李氏朝鮮)の人々は、子供が泣きわめくのを叱るとき「鬼將軍が来るぞ」といえば、子供は涙を流しても泣き声をたてなくなるように、この御方を羅刹・夜叉・噉人の

類になぞらえているほどだが、その猛々しく勇ましい力に恐れおののいているのが知られよう。日本に戻るときに、この御方は陥れた相手方の城門をもって帰って、京観としたのだよ。V

祖母は、この高麗門を実際によく見て、その材料が巨大で珍しい様子を知っていただけでなく、また父老や年長者から、かれらが目にしていて、世の中に伝えられていない鬼將軍の戦場における事蹟を聞いていた。私の母方の従姉が⁽³⁾肥後の武士である水間氏の子に嫁いたが、祖母は従姉が外孫であったことからとくに寵愛していたので、舅・姑や夫となる人々がどうであるかをよく知るために一緒にいてゆき、三年の間逗留していた。江戸に帰ってくると、かいまぎの中の私に鬼將軍のことをあれこれと語っては慰めとしていた。私が眠りかけたとき、夜ごとにいつもそうであった。今から四、五十年前のことであるが、まだ耳に残っていて忘れられない。

そののちに、僧侶となった従弟の香洲が西国をめぐ

って帰ってくる⁽⁴⁾と、肥後の国には近頃才能ある人士が多数いると語ったが、私はまだそうではあるまいと疑っていた。ここ五、六年のことだが、藪(藪震庵)・墨(墨君徴)の二君と知り合うようになって、⁽⁵⁾両者ともに古典を深く探究して詩の道に遊んでおり、その著述も風雅を極めていることを知り、私は驚きいぶかしく思うようになった。去年になって、肥後の「文学」である水足君という者が、藪君を仲介として遠く書簡をもたらし、私の言葉によってその詩巻を飾りたいと要請してきた。詩巻をひらくと、水足君が子息を連れて浪速の客館に韓使(朝鮮使)を訪ねた⁽⁶⁾おりに応酬した詩であった。文芸の園において対陣し互角にわたりあい、勇気を奮って勝を争い、勇ましくも負けることをよしとしなかった。ここに至って私は、長いこと溜め息をつき、つぎのように述べよう……

△ああ、肥後と韓の人々は、昔は武力によって争い、今は文学によって競っているが、これはまさに世の中がよく治まっている効驗にはかならない。鬼將軍が武

力による功績を挙げてから、その遺風が国の風俗に残されてゐることは、前々から聞き及ぶところである。

だから武芸によつて頭角をあらわし大先生と呼ばれた者は数限りなくいるだろう。しかし、今の時世はそうではない。太平の世の中が百年続き、加えて憲廟（徳川綱吉）の学問を重んじた治世が日本の隅々にまで行き渡つてゐる。文芸の才能に溢れた者が輩出することも、中土（中国）にも劣ることはない。昔の争いは武士によつたが、今の争いは君子によるのだから、この詩巻は高麗門にもまつたく劣らないといえよう。V
 「文学」として選出された名譽が国中に重んじられてゐることは、もとより私が述べるまでもない。汗血馬のように勝れた者が日々に雄々しく進めば、どこまで進むか定めようもなからう。ただ私は、祖母の言葉がまだ耳に残つていたために、肥後の風俗がおおいに変わった理由を叙文として書くことにした。

〔訳注〕

- (1) 本作品の成立年代は、序文依頼を仲介した墨君徽（住江滄浪）や藪震庵に対する書簡の年代から享保六年（一七二二）の夏と推定した平石直昭氏の見解に従う（『徂徠年譜考』二一九～三〇頁）。水足屏山、名は安直、字は仲敬又は土方は、浅見綱斎に師事した朱子学者で、『屏山詩文集』のほか、『山崎先生行実』『尚齋先生実紀』などの著述があり、享保十七年（一七三二）に六十二歳で没した。水足博泉、名は安方又は方、字は斯立又は業元は、住江滄浪に師事し、徂徠が「水神童」と褒めたたえたことで知られてゐるが、父屏山の死後まもなく二十六歳の若さで不幸な死を遂げたという。『徂徠集』には、水足親子宛ての書簡がそれぞれ二通取められている。
- (2) 原文には「太太孺人」とあるが、徂徠が何に依拠して用いてゐるかは不明である。『徂徠集便覧』に「祖母」という指摘があり、また文脈からもそのように解釈して不都合ではないので、「祖母」と訳

した。「祖母」を「太婆」と記す用例（孔平仲・代子 広孫寄翁詩）からすれば「太」は尊称と考えられる。また「孺人」を『礼記』曲礼上の用例に従って「大夫の妻」と解釈すれば、「太大」は祖母に対する尊称と考えられる。この祖母は、熊本の水間氏に嫁いだ母方の従姉が「外孫」にあたるという記述から考えると、祖徠の外祖父（正しくは母の養父で四百五十石取の旗本）児島正朝の妻（六百石取の旗本山角勝重の娘）と推定される。事実、「祖徠先生年譜」（関西大学付属図書館泊園文庫蔵）によると、祖徠は四歳の頃、父方庵が京にでかけたため、母とともに児島正朝の家に暮らしたという。なお、こうした祖徠の母方の親戚関係については、平石直昭『祖徠年譜考』に詳しい。ただ、平石氏は本作品の「太大孺人」を『鈴録序』の「祖母母ともに将種なり」という記述と結びつけて父方である荻生家の祖母と解釈しているようにみえる（二八頁）が、この点については以上に述べた理由から疑問が残る。

(3) 原文には「内姉」とある。「内兄弟・内姉妹」には、「母の兄の子」（儀礼・喪服）という意味と、「妻の兄弟・姉妹」（晋書・阮瞻伝など）という意味があるが、注(2)にも触れたように「太大孺人」にあって「外孫女」にあたるという記述から「母方の従姉」という意味に解釈した。ただし、この女性について詳しいことは分からない。

(4) 祖徠の母方の従弟にあたる香洲が熊本に暮らしたことについては、訳注稿(二)所収の「送香洲師序」を参照のこと。香洲の履歴については、母の姉夫婦の子供で、早く両親を失ったということ以外に詳しいことは不明であるが、熊本が父祖の国だという記述からすると、先にみた「内姉」が水間氏に嫁いだという事蹟に何らかの関わりがあるのかもしれない。ただし、水間氏に嫁いだ「内姉」が香洲の姻戚にたらなるといふ証拠はなく、こうした姻戚関係が「内姉」の件とは別にあり、母方の親戚関係において熊本とはかなり緊密な関係があったということ

であろう。

(5) 藪震庵が徂徠のもとを訪れたのは享保二年(一七二七)のことであり、墨君徽(住江滄浪)も享保四年(一七一九)までには徂徠入門している。なお、徂徠は墨君徽の兄にあたる中瀬文山の依頼で正徳五年(一七一五)に「惟適園六景叙」を書いてい

るが、これについては訳注稿(三)を参照のこと。

官刻六諭衍義叙

是歳冬、有司奉⁽¹⁾口教⁽²⁾梓⁽³⁾行六諭衍義、迺以⁽⁴⁾茂卿旁嫻⁽⁵⁾象胥⁽⁶⁾之學⁽⁷⁾也、政府行⁽⁸⁾本府、特口召俾⁽⁹⁾譯進⁽¹⁰⁾、又俾⁽¹¹⁾作⁽¹²⁾敍⁽¹³⁾其由⁽¹⁴⁾。伏以昔在唐虞時、契敷⁽¹⁵⁾五教⁽¹⁶⁾、周司徒鄉六行八刑⁽¹⁷⁾、明德親民⁽¹⁸⁾、養老⁽¹⁹⁾、敍齒⁽²⁰⁾之禮、莫⁽²¹⁾不⁽²²⁾以⁽²³⁾教化⁽²⁴⁾爲⁽²⁵⁾先者、漢唐而還、以及⁽²⁶⁾明清⁽²⁷⁾、孝悌力田⁽²⁸⁾、木鐸⁽²⁹⁾老人之設、導⁽³⁰⁾愚化⁽³¹⁾蚩⁽³²⁾、惇⁽³³⁾倫睦⁽³⁴⁾俗⁽³⁵⁾、誠爲⁽³⁶⁾三⁽³⁷⁾百⁽³⁸⁾王⁽³⁹⁾率由⁽⁴⁰⁾之常典⁽⁴¹⁾也。其書蓋放⁽⁴²⁾古諸誥⁽⁴³⁾之遺意⁽⁴⁴⁾、以⁽⁴⁵⁾俚言⁽⁴⁶⁾行⁽⁴⁷⁾之。不⁽⁴⁸⁾

節であろう。この年に来日した使節とは徂徠も会見

しているが、徂徠はこれが初めての会見であった。

(7) 徳川時代になって文化が進んだという記述は、「叙江若水詩」(訳注稿(一)所収)以来たびたびうけられていたが、綱吉の治世を特に強調するのは本作品が始めてである。『太平策』が書かれたこの時期の徂徠の胸中を知ろうえで参考になろう。

(澤井)

假⁽¹⁾丹墀⁽²⁾、無⁽³⁾事⁽⁴⁾脩辭⁽⁵⁾、務卑⁽⁶⁾之而勿⁽⁷⁾甚高論⁽⁸⁾。施⁽⁹⁾諸農⁽¹⁰⁾、峻⁽¹¹⁾紅女⁽¹²⁾、屠酷⁽¹³⁾之徒⁽¹⁴⁾、辟⁽¹⁵⁾如⁽¹⁶⁾耳提而面命⁽¹⁷⁾之⁽¹⁸⁾。愜⁽¹⁹⁾于聽⁽²⁰⁾、沃⁽²¹⁾于心⁽²²⁾、順乎莫⁽²³⁾有⁽²⁴⁾天闕⁽²⁵⁾雅聞⁽²⁶⁾之患⁽²⁷⁾。務⁽²⁸⁾懲⁽²⁹⁾事情⁽³⁰⁾、厭而⁽³¹⁾飲⁽³²⁾之⁽³³⁾、委曲⁽³⁴⁾開說⁽³⁵⁾、弗⁽³⁶⁾喻⁽³⁷⁾弗⁽³⁸⁾措⁽³⁹⁾。假使⁽⁴⁰⁾麗⁽⁴¹⁾頊⁽⁴²⁾至⁽⁴³⁾春⁽⁴⁴⁾鸞⁽⁴⁵⁾之人⁽⁴⁶⁾聽⁽⁴⁷⁾之⁽⁴⁸⁾、亦必能帖⁽⁴⁹⁾服⁽⁵⁰⁾其心志⁽⁵¹⁾、不⁽⁵²⁾敢爲⁽⁵³⁾惡⁽⁵⁴⁾。可⁽⁵⁵⁾謂⁽⁵⁶⁾閭里⁽⁵⁷⁾之善教⁽⁵⁸⁾也。獨以坊刻諸書、皆華船所⁽⁵⁹⁾齋來⁽⁶⁰⁾、崎港買人⁽⁶¹⁾所⁽⁶²⁾貿易⁽⁶³⁾、人人得⁽⁶⁴⁾購⁽⁶⁵⁾。學士⁽⁶⁶⁾・大夫⁽⁶⁷⁾、又擇⁽⁶⁸⁾其可⁽⁶⁹⁾者⁽⁷⁰⁾、私

自讎校授⁽⁴¹⁾梓、布⁽⁴²⁾于寰區、固無煩⁽⁴³⁾口官處分。而斯乃琉球國所⁽⁴⁶⁾致、藏⁽⁴⁴⁾諸天祿・石渠之上、無復兼本流⁽⁴⁵⁾落人間⁽⁴⁶⁾者、或聞⁽⁴⁷⁾其名⁽⁴⁷⁾希⁽⁴⁷⁾一觀、末⁽⁴⁷⁾由⁽⁴⁷⁾獲⁽⁴⁷⁾之、故有司特奉⁽⁴⁹⁾行其事⁽⁵⁰⁾焉。我⁽⁵¹⁾國家所⁽⁵¹⁾以崇⁽⁴⁸⁾教⁽⁴⁸⁾尚⁽⁴⁸⁾學、啓⁽⁴⁸⁾迪斯民⁽⁴⁹⁾、其用⁽⁵⁰⁾心⁽⁵⁰⁾豈不⁽⁵¹⁾至⁽⁵¹⁾深⁽⁵¹⁾厚⁽⁵¹⁾也乎。海內受讀者、其仰體⁽⁵²⁾口盛德⁽⁵²⁾之意、其君子務端⁽⁵³⁾己率⁽⁵³⁾物⁽⁵³⁾、先⁽⁵⁴⁾風化⁽⁵⁴⁾、期⁽⁵⁴⁾於刑措⁽⁵⁵⁾。其小人務⁽⁵⁶⁾孝慈⁽⁵⁶⁾成⁽⁵⁷⁾俗、安⁽⁵⁸⁾分樂⁽⁵⁸⁾業⁽⁵⁹⁾、道⁽⁶⁰⁾於罪戾⁽⁶⁰⁾、全⁽⁶¹⁾其首領⁽⁶¹⁾、長⁽⁶²⁾其子孫⁽⁶²⁾、優⁽⁶³⁾游乎昇平⁽⁶⁴⁾之澤、冀⁽⁶⁴⁾以弗⁽⁶⁴⁾負⁽⁶⁴⁾口國家⁽⁶⁵⁾仁民⁽⁶⁵⁾之心⁽⁶⁵⁾哉。陪⁽⁶⁶⁾臣⁽⁶⁶⁾茂卿⁽⁶⁶⁾授⁽⁶⁷⁾簡⁽⁶⁷⁾、謹⁽⁶⁷⁾敘⁽⁶⁷⁾所⁽⁶⁷⁾聞⁽⁶⁷⁾於政⁽⁶⁷⁾府⁽⁶⁷⁾者⁽⁶⁷⁾如⁽⁶⁷⁾此。享保六年辛丑十月十一日。甲斐國臣物茂卿、拜手稽首⁽⁶⁸⁾、奉⁽⁶⁸⁾口教⁽⁶⁸⁾敬撰⁽⁶⁸⁾。

〔語注〕

(1) 論語・泰伯入籩豆之事、則有司存。 (2) 史記・蘇秦傳入天下卿相人臣及布衣之士、皆高賢君之行義、皆願奉教陳忠於前之日久矣。 (3) 周禮・秋官入象胥、掌蠻閩夷貉戎狄之國使、掌傳王之言而諭說焉。 (4) 宋史・歐陽後漢書・馬融傳入朔狄屬象胥而來。

脩傳入在其政府、與韓琦同心輔政。 (5) 書・舜典入契、百姓不親、五品不遜、汝作司徒、敬敷五教。在寬。 (6) 周禮・大司徒入以鄉三物教萬民而賓與之、一日六德：二日六行、孝友睦婣任恤。三日六藝。：以鄉八刑糾萬民。 (7) 禮記・大學入大學之道、在明明德、在親民、在止於至善。 (8) 禮記・文王世子入凡釋奠者、必有合也。有國故則否。凡大合樂必遂養老。 (9) 禮記・中庸入燕毛、所以序齒也。 (10) 漢書・董仲舒傳入古之王者明於此。是故南面而治天下、莫不以教化爲大務。 (11) 漢書・惠帝紀入舉民孝弟力田者復其身。 (12) 論語・八佾入天下之無道也久矣。天將以夫子爲木鐸。 (13) 班固典引入惇睦辯章之化洽。 (14) 荀子・不苟入百王之道、後王是也。 (15) 書・微子之命入率由典常。 (16) 輟耕錄・屈戌入古金鋪之遺意。 (17) 左思・魏都賦入非疏糲之士所能精、非鄙俚之言所能具。 (18) 書・梓材入若作梓材、既動樸斲、惟其塗丹雘。 (19) 易・乾・文言入修辭立其誠、所以居業也。 (20) 史記・張釋之傳入文帝曰、卑之、

母甚高論▽。(21) (劉楨) 大暑賦△農畷捉罽而去疇▽。
 (22) 漢書·酈食其傳△農夫釋耒、紅女下機▽。(23) 淮南子·說林訓△酤酒買肉不離屠酤之家▽。(24) 詩·抑△匪面命之、言提其耳▽。(25) 書·說命上△啓乃心、沃朕心▽。(26) 莊子·逍遙遊△背負青天而莫之夭闕者▽。(27) (郭璞) 注山海經序△疏其壅闥▽。(28) 史記·孟軻傳△梁惠王不果所言、則見以爲迂遠而闊於事情▽。(29) (杜預) 春秋左氏傳序△優而柔之、使自求之、鑿而飭之、使自趨之▽。(30) 後漢書·仲長統傳△古來繞繞、委曲如纜▽。(31) 魏書·衛覬傳△非破家爲國、殺身成君者、誰能犯顏色、觸忌諱、建一言、開一說哉▽。(32) 禮記·中庸△有弗學、學之弗能弗措也▽。(33) 書·堯典△父頑、母嚚、象傲▽、漢書·董仲舒傳△其遺毒餘烈、至今未滅、使習俗薄惡、人民頑嚚、抵冒殊抃▽。(34) 禮記·哀公問△寡人蠢愚▽。(35) (王安石) 曹公行狀△後遂帖服、皆爲用▽。(36) 孟子·告子下△天將降大任於是人也、必先苦其心志▽。(37) 周禮·小宰△聽閭里以版圖▽、漢書·宣帝紀△具

知閭里奸邪、吏治得失▽。(38) 禮記·學記△善教者、使人繼其志▽、孟子·盡心上△善政不如善教之得民也▽。(39) 荀子·儒效△通財貨、相美惡、辨貴賤、君子不賈人▽。(40) 史記·貨殖傳△以物相貿易▽。(41) 後漢書·和熹鄧皇后紀△詣東觀、讎校傳記▽。(42) 後漢書·逸民傳論△蟬蛻寰埃之中、自致寰區之外▽。(43) 南史·沈僧昭傳△國家有邊事、須還處分▽。(44) (班固) 西都賦△有天祿石渠典籍之府▽。(45) 南史·鄒紹傳△法盛詣紹、紹不在、直入竊書。紹還失之、無復兼本▽。(46) (韓愈) 調張籍詩△流落人間者、太山一豪芒▽。(47) 論語·子罕△雖欲從之、末由也已▽。(48) 漢書·刑法志△制禮以崇敬、作刑以明威▽。(49) 書·太甲上△旁求俊彥、啓迪後人▽。(50) 論語。陽貨△飽食終日、無所用心▽。(51) (蘇軾) 寄劉孝叔詩△詔書惻怛信深厚、吏能淺薄空勞苦▽。(52) 詩·大序△頌者美盛德之形容▽、輟耕錄·闡駕上書△散散王士宏等不體聖天子撫綏元元之意▽。(53) 後漢書·陳寔傳△在鄉里平心率物▽。(54) 詩·關雎序△上以風化下▽。

(55) 書・舜典へ期于無刑、荀子・議兵へ傳曰、威厲而不試、刑錯而不用、此之謂也。(56) 論語・爲政へ子曰、臨之以莊則敬、孝慈則忠、舉善而教不能則勸。(57) 禮記・學記へ君子如欲化民成俗、其必由學乎。(58) (蘇軾) 林子中以詩寄文與可及餘與可既歿追和其韻詩へ胡不安其分、但聽物所誘。(59) 史記・貨殖傳へ老子曰……安其俗、樂其業。(60) 左傳・莊公二十二人免於罪戾。(61) 史記・匈奴傳へ使老者得息、幼者得長、各保其首領而終天命。(62) 書・五子之歌へ有典有則、貽厥子孫。(63) 詩・卷阿へ優游爾休矣。(64) 漢書・梅福傳へ升平可致。(65) 孟子・盡心上へ仁民而愛物。(66) 禮記・曲禮下へ列國之大夫、入天子之國、曰某士。自稱曰陪臣某。(67) (謝惠運) 雪賦へ授簡於司馬大夫。(68) 書・皋陶謨へ皋陶拜首稽首。

官刻六論衍義の叙⁽¹⁾

この歳の冬、幕府は命令を奉じて「六論衍義⁽²⁾」を版行せんとしたのだが、私、茂卿がかたわらに通訳の学(口語の中国語)を学んでいたので、幕府は、本藩に命じて、とくに私を召し、翻訳を進上させ、また版行するいわれを叙文として書かせた。

伏して考えるに、昔、唐虞(堯舜)の時代、契が義、慈、友、恭、孝の五つの教えを世に行ったこと、周代の「司徒」の「郷の六行八刑」、「明德親民」の教え、「養老叙齒の礼」⁽³⁾、これらはいずれも教化を第一としており、漢唐以来、明清に及ぶまで「孝悌力田」「木鐸老人」⁽⁴⁾の制度を設けたのだが、愚者を導化し、人々を誠実たらしめ、風俗を和らげるといふのは、まことにもろもろの王の従い由る不変の規範である。

この書は、おそらく古えのもろもろの「誥」⁽⁵⁾に遺された意に倣い、身近な言葉によって教化を行おうとしたものであろう。華麗さをてらわず、修辭にこらず、つとめて平易を心がけ、高尚をきとらず、農民の男

女、居酒屋に入りびたっている連中に、顔をつきあわせ、耳を引っ張るようにして教えを施し、聴くに心地好く、心を潤し、おだやかにして人々を抑圧することもなく、つとめて事の次第を明らかにし、人々を満足させ、委細をつくして説きあかし、あくまでも論していく。頑固者や愚か者でもこれを聴けば、また必ず素直に従ってけっして悪をなさなくなる。村里を教化するのにはちようどうってつけの「善教」といえる。

民間で刻されたもろもろの書物は中国から船によって持ち来され、長崎の商人の手を経て人々は購入できる。学者や士大夫はそのうちの適切なものを選んで私的に校定、版行し、あまねく国内に及ぼしたのであって、もとより官の手を煩わすことはなかった。しかるに琉球国が幕布に献上したものは、秘閣に蔵され、同一の刻本の世間に流布することもなく、その存在を聞いて一度は眼にしたいと望んでも、そうする手段はなかった。かくて幕府は、とくに「六論衍義」を版行することとしたのだ。教えと学問を尊んで、民を教え導

くためであって、わが「国家」の配慮は、なんと深くまた厚いことであろう。国内のこの書の読者よ、仰いで幕府の盛んなる徳の意図するところをよく理解してほしい。

在上の君子は、つとめて己を正しくし、物を適切に判断し、自然に人々を化することを第一とし、刑罰を用いないことを期せよ。下々の小人は、つとめて孝慈を習俗となし、おのれの分に安んじ、おのれの業を樂しみ、罪に陥らず、その寿命を全うし、子孫を育て、天下太平の恩沢に浴し、願わくば国家の民を慈しむ心に背くなかれ。

陪臣茂卿は竹簡を授けられた文章を書くように言われたので、謹んで政府に聞いたことを叙した。

享保六年辛丑十月十一日。甲斐国、臣物茂卿、拜手稽首し、命を奉じて敬しんで撰す。

〔訳 注〕

(1) この叙は末尾にあるように享保六(一七二二)

年の作。なお、本文の訓点については官刻本(早稲田大学図書館蔵)の訓点を参照した。

(2) 「六論衍義」は明の太祖の「六論」を明末の范鉉が白話をもって平易に敷衍、説明した書。清の世宗は「六論」を欽定とし、庶民教化の一助たらしめたが、それにともなつてこの書もおおいに行われた。

この書は琉球国から島津藩を通して幕府に献上されたが、これを官において版刻することについて徠徠は反対であった。その間の経緯については、中村忠行氏「儒者の姿勢」(『天理大学学報』七八号 一九七二)を参照されたい。なお、官版の底本となつたのは康熙四七(一七〇八)年、福州の琉球館で重刻されたもので、琉球国の正議大夫程順則の自費による出版であった。

(3) 「明德親民の教」「養老叙齒の礼」は「大学」に基づいている。なお、徠徠の「大学」、とくにこの箇所にかかわる解釈については、澤井啓一「荻生徠徠の『大学』解釈」(『フィロソフィア』七〇 一九

八二)を参照されたい。

(4) 明代の制によれば毎郷每里に木鐸一個を備え、里内の老人・痲疾の者あるいは警者を選び、小児をして牽引せしめ、鐸をもって毎月六回、里内を循環して六論を叫喚し、あまねく衆人に布告せしめた。かくして郷村の教化・防犯を計つたのである。

(5) 「経子史要覽」の「尚書」の条に、「誥トハ告ニ同ジ。衆人ニ告ルト云コトナリ」とある。

(6) 『通行一覽』によると、琉球国から「六論衍義」を入手した島津藩は享保四(一七一九)年にこの書を幕府に献上したと推定される。島津藩が琉球国から「六論衍義」を入手したのは正徳四(一七一四)年と考えられる。前掲「儒者の姿勢」参照。なお、原文にみえる「天祿」「石渠」は語注にも示したようにいずれも漢代の書籍を蔵した宮殿の名称。

(岡本)

送釋玄海歸崎陽序

崎陽玄海上人將西歸、謁予乞言。予曰、瞿曇之道、我未之學也。吾將何言。然上人好文、無已其文邪。瞿曇之世尚矣、而其言朱離、其文盤行、汶汶習習、不可躋作者之林。大藏八千、譯者以之、其在魏晉之際邪。清言滌之、里言訛之。故瞿曇之文、莫踰六朝而上之者、譯之故也。上人業已與吾黨狂簡之士游者、十有餘年、洛陽服子遷、金華平子和、盛稱其文、自釋氏以來、未有上上者、非誣也。之二子者、污不阿其所好、豈易言哉。上人亦喜誦左氏·司馬之書、而悲夫穆天子之傳不可得、以讀焉、以其當瞿曇之世也。今夫崎陽者、海西大都(20)會、夷夏之交也。邇之朝鮮·流求、遠之歐駱·南交·佛齊·佛狼·瓜哇·渤泥之諸夷、莫不畢至。吾聞有運與羅斛者、金梵貝葉、赤納螺結、蓋古身毒之南竟也。其人歲或一至、必有能傳瞿曇之言者、而上人譯之、豈復有什與舛之陋乎。上人之志、吾識其大者乎爾。雖然、滔滔者天下皆是。假使上人職

諸名山大川之上、雞足之仙、誰其遇之。安知千歲之後、必有上上者乎。且上人生崎陽、方其幼也、尚未有知。迨東游以求道、所經歷大都者數十、小都者數百、足跡殆乎窮海之濱、得與服平二子從游、而後知日本小也。今西歸崎陽、以與天下人游、而益知天下小也、則身毒豈有能傳瞿曇之道者乎。上人其反求諸什與舛之譯、落落者玉、碌碌者石、文章之道、明若觀火。大聖千歲且暮遇之、則豈必有曩者陋哉。吾所以屬上上者、是已。上人曰、吾之歸也、省其親也。詩曰、人之有心、吾忖度之者、夫子之謂也。吾其暮年、必將復見夫子。迺行。

〔語注〕

(1) 詩·匪風入誰將西歸、懷之好音。(2) 禮記·內則入凡養老、五帝憲、三王有乞言。(3) 涅槃經·梵行品入迦毗羅城淨飯王之子、姓瞿曇氏、字悉達多。(4) 論語·衛靈公入未之學也。(5) 孟子·公孫丑下

予何言哉。 (6) (岑參) 感舊賦 幸逢時主之好文、不學滄浪之垂釣。 (7) 孟子・梁惠王上 無以則王乎。 (8) 後漢書・南蠻傳 衣裳班蘭、語言朱離、詩・鼓鍾 以雅以南以備不愆 傳 西夷之樂曰朱離。 (9) 夢溪筆談・藝文一 郭索蟹行貌也。 (10) 史記・屈原傳 受物之汶汶者乎、新序・節士 汶汶黑黑、以是爲非、以清爲濁。 (11) 楚辭・悲回風 歲習習其若類兮。 (12) 禮記・樂記 作者之謂聖、論語・憲問 作者七人矣。 (13) 晉書・榮廣傳 廣善清言、而不長于筆。 (14) 莊子・則陽 何謂丘里之言。 (15) 論語・公冶長 吾黨之小子狂簡。 (16) 禮記・祭義 未有遺年者。 (17) 詩・桃夭 之子于歸。 (18) 孟子・公孫丑上 汗不至阿其所好。 (19) 後漢書・南蠻傳 自言、我海西人。 (20) 史記・貨殖傳 邯鄲、亦漳河之間一大都會也。 (21) 陳書・陸子隆傳 綏集夷夏、其得民和。 (22) (張協) 雜詩 歐駱從祝髮。 (23) 書・堯典 申命羲叔、宅南交、明一統志 形勝控制南交。 (24) 宋史・外國傳五 三佛齊國、蓋南蠻

別種。 (25) 皇明世法錄 佛狼機、在海西南、近滿刺加、性兇狡、嗜利善大統。 (26) 明史・外國傳五 瓜哇、在占城西南。 (27) 宋史・外國傳五 渤泥國、在西南大海中、(西川如見) 華夷通商考 渤泥、方言稱保爾祿良。 (28) 明史・外國傳五 暹羅、在占城西南、後分爲羅斛・暹二國。 (29) 宋史・天竺國傳 僧道園自西域還、得貝葉梵經四十夾。 (30) (張籍) 崑崙兒詩 螺髻長卷不裏頭、(白居易) 繡佛贊 金身螺髻。 (31) 史記・西南夷傳 從東南身毒國。 (32) 晏子・雜上 秋風一至、根且拔矣。 (33) 論語・微子 滔滔天下皆是也。 (34) 史記・太史公自序 太史公協六經異傳、藏之名山、書・武威 所過名山大川。 (35) 西域記 莫訶河東入大林、至屈吒播山、唐言雞足。 (36) 戰國・秦策 使東遊韓魏、入其將相、北遊燕趙、而殺李牧、晉書・王羲之傳 頃東遊還、修植桑果。 (37) 漢書・西南夷傳 滇王當羌迺留、爲求道。 (38) 漢書・成帝紀 經歷郡國。 (39) 書・立政 大都小伯、藝人表臣百司。 (40) 周禮・地

官・載師ハ以小都之田任縣地▽。(41) 莊子・祛篋ハ足跡接諸侯之境▽。(42) (謝靈運) 登地上樓詩ハ徇祿反窮海▽、楚辭・大招ハ西薄羊腸、東窮海只▽。(43) 史記・仲尼弟子傳ハ子路喜從游▽、(蘇軾) 范文正公文集序ハ彼三桀者、得從之游▽。(44) 孟子・盡心上ハ孔子登東山而小魯、登泰山而小天下▽。(45) 禮記・射義ハ發而不中、…反求諸己而已矣▽、同・中庸ハ反求諸其身▽。(46) 老子・三九ハ碌碌如玉、落落如石▽。(47) 史記・儒林傳ハ文章爾雅、訓辭深厚▽。(48) 書・盤庚上ハ予若觀火▽。(49) 莊子・齊物論ハ萬世之後、而一遇大聖、知其解者、是且暮遇之也▽。(50) 禮記・檀弓下ハ曩者爾心或開予▽。(51) 詩・皇矣ハ帝省其山▽、金史・章宗紀ハ定職官省親拜墓給假例▽。(52) 孟子・梁惠王上ハ王說曰、詩云、他人有心、予忖度之、夫子之謂也▽、詩・巧言ハ他人有心、予忖度之▽。(53) 左傳・喜公八ハ昔年狄必至▽、史記・燕世家ハ不期年、千里馬至者三▽。

釈玄海の崎陽に帰るを送るの序⁽¹⁾

崎陽(長崎)の玄海上人⁽²⁾が西国に帰るに際して、私に会って言葉を求められた。そこで私は次のように述べよう……

私は釈迦の道を学んでいないので、述べることは何もない。しかし、上人は「文」を好まれているから、「文」について述べよう。釈迦の時代は、はるか遠い時代である。言葉は意味不明で、文章も蟹の横這いのように書かれ、はっきりと作者の意図を確かめることはできない。八千巻の大蔵経も、それが翻訳されたのは魏晉という時代であった。清談の言葉と世俗の言葉とが入り混じっているから、釈迦の「文」が六朝時代以上に溯ることがないのは、ここに理由がある⁽³⁾。

我々のように志は大きいが行ないはぞんざいな者たちと上人が交際するようになって、すでに十年以上が経つ。洛陽(京都)の服子遷(服部南郭)や金華の平子和(平野金華)は、上人の「文」を盛んに誉めて、釈迦以来で上人以上の者はいないといっているが、偽

りではない。この二人は、自分たちの好き嫌いにおもねる者ではないから、その言葉は安易なものではない。また上人も、『左伝』や『史記』を喜んで読み、「穆天子伝」を読むことができないと悲しむのは、それらの書物が釈迦の時代に相当するからであった。

崎陽は、いま西国の大都會で、夷狄と中華（日本）とが交流する場所である。近くは朝鮮・琉球、遠くは欧駱・南交・仏齊・仏狼・瓜哇・渤泥などの諸国がこぞってきている。聞くところによれば暹と羅斛とは、梵語を木の葉に書き、赤い衣を着て巻き貝のような髪を結っているが、古代の身毒（インド）の南境に位置しているのだろうか。かの地の人々は年に一度くらいはやってくるが、釈迦の言語を伝える者もかならずいよう。上人が「直接原典を」翻訳するならば、卑陋な鳩摩羅什と玄奘の翻訳はなくなろう。上人の志がこのように大きいことを私はよく知っている。

とはいえ、滔々と水が流れ行くように変化することは世界中がそうである。もしも上人が翻訳を名山の頂

きや大河のほとりあるいは、雞足山の奥深くに取めたならば、誰もそれをみることができない。千年の後に上人のいたことを誰も知ることはない。そのうえ、上人は崎陽に生まれたが、幼少の頃から「今ほどの」「知があつたわけではなく、道を求めて東に遊学し、足を踏み入れた所がないまでに数十の大都會や数百の小都會を通り過ぎ、服子遷や平子和と交際するようになって、日本の小さいことを知ったのではないか。いま西方の崎陽に帰って、世界中の人々と交際したならば、世界の小さいことをよく知ることだろう。そうだとすれば、身毒に釈迦の道を伝える者がいよう筈もない。上人は鳩摩羅什と玄奘の翻訳に振り返ってみるしかあるまい。玉は多く石は少なく、文章の道は明々白々であり、千年も以前の大聖人に朝夕会うことができるのだ。⁽⁷⁾鳩摩羅什と玄奘の翻訳がかならず卑陋だということではあるまい。私が上人に望みたいのはこのことだけである。▽

玄海上人は次のように述べた……

へ私が帰るのは、父母を見舞うためです。詩に「人が思うことがあれば、私はそれを推しはかる」とあるが、これはあなたのことのようなのですな。私は翌年には再びあなたにお会いするつもりです。V
そして、帰っていった。

〔訳注〕

(1) 本作品の成立年代は、平野金華が玄海上人に贈った「送玄海上人序」(金華稿四)に「癸卯夏上人将帰于西肥」とあることから、享保八年(一七二三)と推定できる。

(2) 玄海上人については、『徂徠先生文集解』によれば長崎の大音寺の僧だという。本文にみえるように、徂徠ばかりでなく、服部南郭や平野金華とも交流が深かった。大音寺は、長崎市にある浄土宗の大寺であり、徂徠は享保四年(一七一九)に「崎陽大音寺伝上人碑」(徂徠集卷十四、日本思想大系36『荻生徂徠』所収)を書いている。ただ、このとき

の依頼者は慧海上人であり、玄海上人ではない。したがって、現在のところ玄海上人の事蹟については、詳しいことは分からない。なお『徂徠集』(巻三十)には玄海上人宛ての書簡が二通収録されている。

(3) 仏典の翻訳が六朝期に行われたために「文」として劣っているという理解は、享保二年(一七一七)に徂徠が書いた「送魯子帰海西序」(訳注稿(四)を参照のこと)にも見える。

(4) 「穆天子伝」は、おもに周の穆王の西遊について書かれた小説書で、撰者不詳であるものの、晋代に魏王墓から発見されたという伝承のもとに、郭璞の注が付された形で伝えられている。

(5) これらの地名・国名について徂徠が何に依拠しているのか、いまのところよく分からない。

(6) この二つの地名については、享保四年(一七一九)に成立したと推定される「贈善羅語人」(徂徠集卷十六)が想起されるが、詳しいことは分からない。

い。

(7) 「聖人に朝夕会うことができる」という表現は、語注に示したように『莊子』齊物論に典拠をもつが、『学則』一・二を初めとして、徂徠は「古文辞学」の効用をして示す言葉として好んで用いている。

(澤井)